

「おかえり」「ただいま。」毎日交わす、たったこれだけの言葉に、僕はどれほどの意味があるのかを知りませんでした。家族はいて当たり前、そんな風に思っていた僕にとって日常の風景は何の変哲もない物でした。けれど、ある日を境にその当たり前が、僕にとって大切な宝物であることに気づかされました。

小学六年生の冬、父が倒れました。原因は過労とストレス。仕事が忙しいとは聞いていましたが、あんなに元気だった父が、救急車で運ばれていく姿を見て、僕はただ呆然と立ち尽くしていました。「どうして気づけなかったんだろう」それが、父が倒れた後に僕の頭をずっと離れなかった思いでした。

父は家族のために働いていました。毎朝早く家を出て、夜遅く帰ってきます。疲れているはずなのに、僕のテスト結果を見ては笑ってくれたり、時には厳しく叱ってくれたりもしました。そんな父に、僕は感謝の言葉を口にしたことがほとんどありませんでした。

父が入院してから、我が家は少しずつ変わりました。母は仕事と家事を両立しながら父の見舞いにも通っていました。僕も兄も、自分のことはできる限り自分でするようになりました。夕飯の準備を手伝い、洗濯物をたたみ、弟の勉強を見る日々、忙しさに追われる日々だったけれど、不思議と心は温かかったです。それは、家族が力を合わせて支え合っていたからだと思います。ある日、見舞い先の病院で父にこう言われました。「家のこと、ありがとうな。お前たちに助けられてるよ。」その言葉を聞いたとき、僕の目には涙が溢れました。感謝の気持ちを伝え合うって、こんなにも心が震えるものなんだと初めて知りました。

今までは、家族がいて当たり前、食事が出てくるのが当たり前、父が働きに出て、母が家を支えてくれるのが当たり前だと思っていました。けれど、そうじゃなかった。家族一人ひとりが、それぞれの場所で努力して、思いやって、支え合っていたからこそ、僕たちは笑顔でいられたのです。

父は今、少しずつ体調を取り戻し、在宅勤務をしながら療養しています。そんな父を支える母の姿、そして自分が家のことを手伝っていることに、以前にはなかった誇らしさを感じています。あの時、父が倒れなければ、僕はこの大切なことに気づくことはなかったかもしれません。

僕は今、「ありがとう」という言葉を以前よりも多く使うようになりました。家族が料理を作ってくれたとき。洗濯をしてくれたとき。勉強を見てくれたとき。その一つ一つに感謝するようになりました。「ありがとう」「ごめんね」「助かったよ」そんな言葉を交わすことで、家族の絆はより深まっていくのだと、僕は身をもって知りました。

家族は、一番近くにいてからこそ、つい甘えてしまう存在です。でも、だからこそ、感謝や思いやりを忘れてはいけないということに、僕は改めて気付かされました。そして何より、自分が家族の一員として、誰かを支えることができるということに、僕は今、誇りを感じています。

これから僕が大人になっていく中で家族という存在がどれだけ大切で、温かいものであるかを、ずっと忘れずにいたいのです。そして、将来僕が新しい家族を持ったときにも、今日家族から学んだ思いやりと感謝の気持ちを伝えていきたいです。

「おかえり」「ただいま。」たった一言だけど、その言葉の裏には、深い愛情とつながりがあります。僕にとって家族とは、何があっても支え合い、乗り越えていける、一番の味方です。